いたみ

『新墾』30-4号

何れにもとれる言葉と今は思いき俯向けば覚ゆ軽き貧血

病む夫に未だ頼りている吾か夕映えいろに朱き口紅(ルージュ)ひく

癒えて纏ふ日のために干す夫の背広寒の空気に緊りゆく昼

ゲームにて諍ふ子らの声荒らし父なき故の昂ぶりとも聞く

乳液がふきこぼれて凍る夜吾がこめかみのきりきりと痛し

一面の真白きものがこの目を覆ふ潔白と言い得る自信ふいに

夏草

『新墾』30-10号

求め来て充たぬ思ひの街の灯よ夜は鋭利に磨がれつゝあり

量りがたき明日を怖れて凭れゐる塗料の匂ひ強き壁の厚きに

陽の位置のたやすく変らず陰に生ふるこの夏草と吾の宿命

散薬を嚥み下す夫の咽喉仏昏き朝あけを醒めて思い出づ

朝の祈祷ながき夫にまつはりて翔ぶ夏蝶の濃き黄の色

磨かれて爪のみ美しき吾が部分湿(しめ)りもつ季よりやゝ順境に

雨に濡れ光るトマトの鮮紅さもつとも身近かなる血縁に似し

易々と掌の中に死なしめし蚊の脆さもとゞめおくべき　夏の譜

眩暈

『新墾』30-11号

背きつゝ夏を過ぎきて眩ゆかり瞳に偽りなき夕焼けの色

少年が吹く笛の音　甘酸ゆく秋のジヤムは煮つめられつつ

真昼暗き階上りゆくときの眩暈罪の意識にも似つ

つやゝかに林檎盛られし夜の卓に向いて愛の具象とはならず

溜めおかむ愛などはなし透明に吹く風を集めてこの身すがし